



指導者の人脈を書きつつ中国の現状を説く  
中嶋教授

# 中国情勢の展望と日本

東京外国語大学教授

中嶋嶺雄

（とし一月二十九日、東京・千代田区の九段会館で行われた山紫会、板垣正の会合同の新年例会の講演の内容です。文責は編集部にあります。）

中嶋嶺雄（なかじま・みねお）氏の略歴  
昭和十一年松本市生まれ。三十五年東京外国語大学中国科卒、東京大学大学院国際関係論課程卒。五十二年東京外国語大学教授、専攻は国際関係論、現代中国学。社会学博士。四十四年から五十五年にかけて外務省特別研究員（在香港）、オーストラリア国立大客員教授、パリ政治学院客員教授。五十六年「北京烈烈」で第三回サントリー学芸賞受賞、「現代中国論」日本人と中国人ここが大違いなど著書多数。

ただ今、ご紹介をいただきました中嶋でございます。

かねてから板垣議員が、私にとっても関係の深い中国大陸をめぐる様々な問題などで、大変高い国家的な見地からご活躍されていらっしゃることに敬服しておりました。そしてまた、当「山紫会」には、永い間中国とかかわった方々をはじめといまして、非常に立派な方々がお集まりだということを知って、非常にうれしく思っています。私のような弱輩が皆様の前で講演をさせていただくことを、大変光栄に思っている次第でございます。

さて、早速本題に入らせていただきますが、ただ今、事務局長さんのお話しにもありましたよう

に、私がこの講演のご依頼をお引き受けした後に、中国の事態がいわば急展開してきたわけでありません。

今回の胡耀邦総書記解任に至る政治的なドラマというものは、それが単に中国共産党のトップリーダー間の内輪もめということだけではなくて、いわば学生デモという非常に高揚した状況を背景にしておりますだけに、極めてドラマチックであり、また衝撃的であったと思います。

やはり中国情勢を見る一つのバロメーターというものに、この学生たちの動きがあるわけであり、古くは五四運動——まさに学生運動から起こって、大きな中国の転換になりました。最近では毛沢東体制末期に起こった天安門事件も、これら学生を中心とした、当時の毛沢東体制末期のいわば大衆の反逆であったわけであり、

そういうふうを考えますと、実は今回の学生デモというのは、確かに鎮圧されてしまいましたけれども、そしてここ当分、かなり厳しい冬の季節を迎えると思いますが、やはり重要な意味をもっている。それはいわば中国が大変もの分かりがよくなって、開放体制になって、西側との協力、あるいは交流も進んできているといわれながら、しかしながら中国が基本的に共産主義一党独裁下にあることはまぎれもない事実であります。こうした中国の体制に対する本質的な反体制運動であった、というところをまず押さえておかなければいけないと思います。

こうした、いわば反体制運動を背景にしていただけに、今回の事態は、現在の中国の体制のあり方、あるいは政治的指導のあり方をめぐって党中央に非常に深刻な亀裂と分裂をもたらしたと言っていると思います。事柄が本質的な事態に直面していただけに、中国共産党の最高指導者としても極めて危機的な状況の中で事態に対処せざるを得

なくなつたわけであり、

そして事件が起りまして、翌日の新聞、あるいは当日のテレビなどで、私もいろいろ意見を求められましたので、お読みいただいたり、あるいは見て下さった方もいらつしやると思いますけれども、今回の事態を要約的に一言で申し上げますと、鄧小平——胡耀邦体制の内部分裂だということ、私は考えております。

### 胡総書記解任の背景

今日の中国の政治状況、経済状況というものを指導してきたのは、まぎれもなく鄧小平その人でありまして、彼自身が経済改革や西側諸国との連携を非常に強調していた。それは鄧小平自身が、いわば毛沢東時代と一八〇度違った路線を歩み始めたことの当然の結果であります。そのいわば「鄧小平体制」下におきまして、胡耀邦は彼の全面的なバックアップで党の最高権力者の地位についた人です。その胡耀邦を解任せざるを得なかつたということは、とりも直さず「鄧小平体制」、鄧小平その人にとつての重大な危機であると、私は思います。

しかも、胡耀邦を解任したことによつて、それでは何か問題が解決したのか、今の中国が抱えている問題に決着がついたのかという、実は何にも問題が解決していないわけであり、従いまして、今回の事態は、今後予想されるかなり流動的な政治情勢の新しいドラマの始まりだ、と見なければいけないのではないかと。

しかも、そうした危機的な状況の中で、最終的には鄧小平と胡耀邦との間にも内部分裂が起り、そして鄧小平は胡耀邦を解任する形——つまり胡耀邦をスケープゴートにすることによつて自らの体制を防戦して、当面とりつくるつたわけ

ですが、その背景には、鄧小平の政策に対するかなり強硬な批判の潮流があることを忘れてはならないわけ、本来この批判の潮流は鄧小平の政策それ自体に向けられるべきであつたと思います。しかしながら、今日の状況の中で、鄧小平を失脚に追いやるということは、中国にとつてあまりにも深刻な事態でありまして、まさに中国が再び文化大革命のような混乱に陥りかねない、この点だけは避けなければいけないという、ある種の暗黙の合意、一種の政治的凝集力が働いて、辛うじて今日の事態で収まっているような気がいたします。

本日は、たとえば現在のいわゆる保守派といわれる人たち——私は必ずしも「保守派」といわずに、「原則派」という方がより適切だと思えますけれども——マルクス・レーニン主義や社会主義の枠組みにあくまでも原則的でなければいけない、こんなことをやったら中国は社会主義ではなくなるんじゃないか。共産党のリーダーシップ——すなわちプロレタリアート独裁、一党独裁が崩れてしまふではないか。そういう危機感を抱いている、たとえば陳雲のようなりーダーたちにとつては、まさに鄧小平のやろうとした政策こそ誤つていたということになるわけであり、

本日にそこまで彼らも要求したいのだと思えます。しかしながらそれができない、そうするまでにはまだまだ状況が熟していないという段階におきまして、批判の標的を胡耀邦にしぼつたところ、今回の重要な特徴があるような気がいたします。

しかも、この胡耀邦は、批判に値するといふか、実はあちこちにすき間があつたわけ、そしてこのすき間をめぐって、鄧小平との関係、つまり鄧小平との信頼関係にも亀裂が入つていた。そこを、いわば反鄧小平連合勢力が一致して突いたん

だ、というふう思う。その過程の中で鄧小平は防戦を余儀なくされ、自らの後継者を全く台なしにするような胡耀邦解任に至ったと、私は考えております。

### 対日友好政策への学生デモ

その辺を少し具体的に見てみますと、そもそも今日のような路線闘争が非常に明確な形をとったのは、一昨年九月の中国共産党全国代表会議の時期であります。この時期は、皆さんもご記憶のように、例の教科書問題、とくに靖国問題をめぐって、北京大学の学生が激しい反日デモを繰り広げた時期です。

この問題につきまして、私は「中国に呪縛（じゆばく）される日本」という題で、『諸君』という雑誌にかなり長い論文を一昨年三月号に書いておりますけれども、あの時の反日デモは単なる反日デモではなく、まさに、いわば鄧小平改革、あるいはいまの中国指導部の日本との友好政策に対する批判を底流にしていたわけでありまして、そのような批判の中で、たとえば中曽根首相についても非常に口ごたないのしりのスローガンがあったわけでありまして。

こういうものをバックに開かれた、中国共産党全国代表会議の時に、すでに明白に路線対立が出ておりました。

そもそもこの中国共産党全国代表会議というのは、中国共産党の政治過程の中でも極めて異例な、ほとんど前例のない会議でした。全国的な会議を開くならば党大会にすればいいんですが、党大会ではなく、代表会議というふうにしたところは、ちょうど八四年ぐらいが鄧小平改革のピークで、農業生産もかなり上向いていましたし、あちこちで経済も非常に活性化していました。その成功の

さ中に全国代表会議という、次の党大会まで待てなかつた鄧小平は、そこで人事の若返りをして一挙に問題を決着しようとしたわけでありまして。

しかしながら実際にその会議が開かれた八月九月になりますと、鄧小平経済改革があちこちでほころびて参りまして、矛盾や亀裂や蹉跌が至るところで表面化してきました。そこをとらえて、この会議の最終日に演説をしたのが陳雲でありまして。

### 強くなった原則派の力

陳雲は、もともとソ連に留学し、しかも早くも五〇年代から党の副主席にまでなった重要な人材でありますし、特に中国の経済運営に関しては長い間の経歴と一言言を持っております。しかも彼は、大躍進政策とか、文化大革命には極めて批判的であつたために一貫して冷や飯を食わされて、その後不遇な状況にいたつております。それだけに中国共産党の中では、毛沢東時代が否定された今日、陳雲の指導力、発言力に対する評価が非常に高い。そして人柄もなかなかいいようございまして、自分自身が何かトップに立とうという野心がないだけに、大変敬愛されているといわれております。現存の指導者の中では、まさに鄧小平と並び立つほどの人材だと言つていいでしょう。そのことを証明するのは、今日、現存の指導者の中でいわゆる選挙が出ているのは鄧小平と陳雲の二人だけなんです。

この陳雲が、全国代表会議の最終日に鄧小平と並んで演説をしました。鄧小平氏は依然として改革を鼓吹し、自らの路線の正当性を主張したわけですが、これに対して陳雲は「今やっていることが、何事だ」と。あの万元戸——日本にもきました、いわば小金をたくさんためた農民たち——「あん

海を渡るマルビシのトビウオ特急便

フェリー用トレーラー120台その他80台

日本カーフェリーグループ

株式会社 マルビシ興運



本社：〒103 東京都中央区日本橋小伝馬町20番3号 電話 03(662)7737(代)  
営業所：川崎・日向・大阪・福岡・厚木・大分  
整備工場：厚木

代表取締役社長 増田 武  
代表取締役専務 西内 恒雄  
(常取)九州地区担当 大崎 清

なものをほめそやしているとは何事か」と言つて、彼はその演説を締めくくつております。

ということは、鄧小平の予測にも反して、改革派にとつて状況がかなり不利になつてきた中で、これに批判を投げかけたいわゆる原則派——俗に言う保守派の人たちが非常にはつきりと異議を申し立てたのが、一昨年九月の中国共産党全国代表大会でした。少なくともそこまで状況をさか上つてみなければなりません。

やがて昨年九月には第六回中央委員会総会が開かれます。つまり今の中国共産党は、八二年九月に十二回党大会がありまして、この十二期の第六回中央委員会総会——六中全会があり、ここではいわゆる「精神文明に関する決議」というものが採択されました。つい昨年九月のことですから、皆さまもご承知のことと思いますが、日本の新聞などは、これによつて中国の改革はさらに進むだろう、いよいよこれからは経済改革からさらに進んで政治改革にいくだろう——というふうに報じておりました。しかし、私自身がこの決議を読んでもみましたら、これはとんでもない。いかに現在の改革路線に対する中国共産党内部の抵抗が強いかということを反映したのが、この決議の文面です。

最近の中国は、何かというとき「文明」ということを言うんです。本来「精神文明」とは一体何か、おかしなことでありませうけれども、本来「文化」と言えはいいところを、もうあの文化大革命によつて今の指導者たちはみんなひどい目に遭つて、毛沢東にさんざん痛めつけられた人ですから、文化大革命という言葉は聞くのもゾツとする。「文化」という言葉そのものがいわばタブーですから、何を言うにも「文明」「文明」と、文明の大安売ります。

われわれは、「文明」というのは、文化よりもっと広いバックグラウンドの中で歴史的な土壌があつて、一つの大きな文化圏、その文化遺産を「文明」と言うんですけれども、中国の場合は、ちょっと上品に、お茶を飲むのも「文明的にお茶を飲む」とか、ちよつとその辺の町がきれいになるのも「文明単位」というようなことを言うわけです。そういう状況の中で「精神文明」の決議が採択されたのですけれども、ここでははつきり保守派、あるいは原則派の力が非常に強くなつた。一昨年はほぼ六・四ぐらいで改革派が強かつたと思ひますけれども、昨年のこの決議はまさに両者五分五分の状況になつてきたと思ひます。

### 傾きかけた「鄧小平丸」

そうなつて参りますと、やはり鄧小平＝胡耀邦体制といわれていた、現在の体制側の中に亀裂が起つてきた。確かに胡耀邦にしてみれば、本来彼は総書記ですから本当は総書記が最高の実力者なんです。ところが何かにつけて鄧小平の一言を気にしなければいけない。鄧小平はどういう立場にあるかという、彼はあくまでも中国共産党中央顧問委員会主任なんです。しかも中国共産党の場合には、主席というものがないので、中国共産党の最高権力者は主席だつたわけなんです。かつて文革、あるいは毛沢東時代には、中国共産党は主席制をやめまして、書記局中心の政治機構に大きく変わったのが、十二回党大会です。ですから、総書記というのは、ソ連共産党の書記長と同じように、書記局の長であり、書記局が日常業務を司り、同時に書記局の長が最高権力者というふうには、党規約では規定されたのです。そのいわば最高権力者である胡耀邦にしてみれば、

ば、彼だつてもう七十を過ぎていたわけですから、鄧小平がいつも何か言うことには煙たい思ひがするでしょう。一方、鄧小平にしてみれば、状況がうまくいつてればいいけれども、保守派の抵抗もある。そういう中でいわば内輪もめが起つた。特に近い最近の内輪もめが起つて、すでに去年の九月ごろ、胡耀邦は、自分は顧問委員会に退き、そして自分のグループの次の人——恐らく胡啓立だと思ひますけれども、こういう人たちを後継者にしたいから、あなたは顧問委員会を辞めてくれ、と言わんばかりのことを言つたという、かなり確度の高い情報があります。

したがつて、この辺からは、単なる路線闘争ではなくて、大きな背景としては、保守派ないしは原則派と改革派の路線闘争を背景にしながら、状況がだんだん現在の鄧小平に不利になつてくる中で、いわば「鄧小平丸」といふ船が傾きかける状態だ、船長（鄧小平）と甲板長（胡耀邦）のあいだでどうしてこんなことになつたんだという、責任を追及しあつたりなすりあうという一種の内部分裂が起つてきた。この内部分裂を察知したか、あるいはそれを利用しようとしたか、敏感な知識人や学生たちが、去年の十二月五日から立ち上がつてきたということです。

### 中国の「三箇苦惱」の脱却に共鳴

私はたまたま十二月初旬に中国に行つておりました。北京の人民大会堂で開かれた「技術文明と現代化」という大きなシンポジウムに出ておりました。最後に私は日本側を代表して報告をいたしました。私はどこに行つても同じことを主張します。それは、はつきりと「現在の中国の改革路線は限界があるであろう。こんなに急ぎ過ぎたつて無理である」ということを申しました。

それはなぜかと言いますと、日本と比較した場合に、そして中国は今、日本の最も進んだ先端的な部分、いわば科学技術にしても、そういうものを一生懸命導入しようとしているけれども、それは無理である。わが国は明治維新以来百五十年かけて今日の日本を築いたではないか。特に明治維新においては、日本はヨーロッパ近代というものと対応するために全面的な努力もし、ある意味では一種の市民戦争まで行って近代化の基礎を固めたのだ。その時中国は「汽車、汽船は孔子さまの乗り給わざるものなりき」と言っていたらば中華思想に安住して、「中国にはすべてがある」と言っていたのではないか。こういうようなことをまず第一に問題提起いたしました。

第二には、日本は第二次大戦に敗北し、戦後ここまで復興したけれども、この戦後三十年間、あなた方の国は毛沢東思想に心酔し、毛沢東思想さえあれば何も要らないといって、熱狂的な自己運動をついこの間まで繰り広げていたではないか。この毛沢東思想にとられていた三十年間に、実は日本も、そして台湾も韓国も、ものすごい勢いで成長した。この三十年間を、一年や二年の新しい開放政策で急激に取り戻そうといったってそれは無理だ、という話をしたのです。

もう一つは、ここが私が一番言いたかったことなんです、日本が成功したのは、資本主義だから成功したのであって、社会主義、共産主義、この体制をとる限り近代化、工業化は無理ですよ、ということをやったわけですよ。

この三つの苦惱——ジレンマに今日の中国は陥っている。中国語ではトリレンマのことを「三箇苦惱」(サンコクナオ)と言うんですが、このトリレンマから脱却するにはかなりの時間がかかるということを感じすべきだ、と。それには一歩一歩着実に行くしかないではないか、というような

話をいたしましたら、その後、それに対して全面的に批判を展開するかと思いきや、むしろそれに非常に共鳴したという発言が相次ぎました。ある知識人などは涙を流さんばかりに、私の手を握って、「よく、そ本音のことを言ってくれた」と言っています。それが十二月初旬でございます。

### デモは一党独裁体制への批判

それで日本に帰ってきてみますと、「あの人民大会堂での中嶋教授の発言に非常に勇気づけられた。今後もぜひ交流してほしい」という手紙が、今回の学生デモのきっかけとなった中国科学技術大学の学者などから私のところにきております。

ということは、そのころは、知識人や先進的な学生の間では、もうこんな体制をとっていたらダメだという、かなりラジカルな、本質的な体制批判があつて、その限りではかなり自由な雰囲気があつたと思います。

しかも、中国科学技術大学というのは、日本の大学ではちょっととたえようがない。たとえば東大とか京大とかの理工系や、東工大というようなものがあるのとはちょっと違っています。筑波大学ともちょっと違って、いわばアメリカのマサチューセッツ工科大(MIT)に匹敵するような——中国の理工系大学には、ご承知のように、精華大学があるわけですが、精華大学よりもさらにプレステイジが高いと思われるような大学になりつつあります。ここから火がついたわけです。

これは「ニワトリと卵」のようなことになりまして、どっちが先であったのか、いわば保守派がかなりじわじわと攻めてきていたために、その批判をかわすために、よく中国にあるタイプなんですけれども、大衆運動に依拠したのではないか。それは文革の時の毛沢東がそうですね。自ら党内

ボールスクリュー・リードスクリュー  
精密親螺子・機械用各種ねじ



美原精工株式会社

代表取締役 小林 利 外

〒557 大阪府西成区玉出西2丁目6番3号  
TEL (06) 657-1230(代)

〒587 大阪府南河内郡美原町平尾804-8  
TEL (0723) 62-2266(代)

で少数派になったときに、紅衛兵運動に手をつけ  
た。同じようなパターンが、少なくともこの十二  
月くらいにありまして、そして運動はみるみるエ  
スカレートしていった。

よく中国の留學生が日本にきて、本心に心から、  
日本の大学はいかに恵まれているかということ  
を言います。私も大学にいますと、まだまだ日本  
の大学はいろいろ不十分なところがあって、予算  
も少ない、なんて思うんですけども、中国の大  
学に比べたらもう別天地らしいですね。

## 胡耀邦への批判集中

今回、安徽省合肥市にある中国科学技術大学から  
起こったデモは、どういうところから起こった  
かという、省の人民代表、つまり地方議員の選  
出が民主的でない。いつも共産党が言う名簿にマ  
ルをつけるようなことはけしからん、それでも民  
主主義か、という問題を提起しているわけです。

それは非常に根本的な問題をついたんですが、  
やがてあちこちの大学にワーツと火の手が広がっ  
ていったのは、それぞれの大学がみないろいろ問  
題を抱えているからです。上海の華東師範大学な  
どは五千名の学生の中に風呂が一つしかない。こ  
れではどうやってわれわれは風呂に入れるのか。  
「われわれは風呂に入りたい」というのがスローガ  
ンだったわけです。中国人の場合、風呂といつて  
も、実際にはシャワーを浴びるぐらいの程度です  
けれども、「われわれは風呂に入りたいたいのだ」とい  
うスローガンが出た。こうして多様な学生運動が  
あちこちに拡大していった。そして十二月中、下  
旬になりますと、その下の胡啓立であったにせよ、彼  
らのコントロールをはみ出していった。そしてい  
わば中国共産党の一党独裁体制そのものへの批判

になっていったのです。

こうなりますと、まずまず鄧小平としては危機  
的な状況に陥って、十二月下旬から一月の初頭に  
かけて、胡耀邦や関係者を中南海の鄧小平弁公室  
に呼び寄せて、詰問したり、責任を追及した。だ  
れども胡耀邦にしてみれば、やっぱり鄧小平に  
対して言いたいことがあるので、彼のことだから、  
いままで鬱積したものがワーツと出てきた。

胡耀邦というのは、日本にきたときのあの振舞  
を見ても明らかのように、ちよつと軽薄なところ  
がある。ある意味では正直なんですね。そうであ  
るがゆえに、胡耀邦にしても、言いたいことを言  
い始めたのでしよう。しかしながら一方、学生デ  
モはまずまずエスカレートしていくという状況の  
中で、党の長老たちが胡耀邦下ろしを始めた。こ  
れが一月初旬から十六日の政治局会議に至る状況  
であったとみてよいと思います。

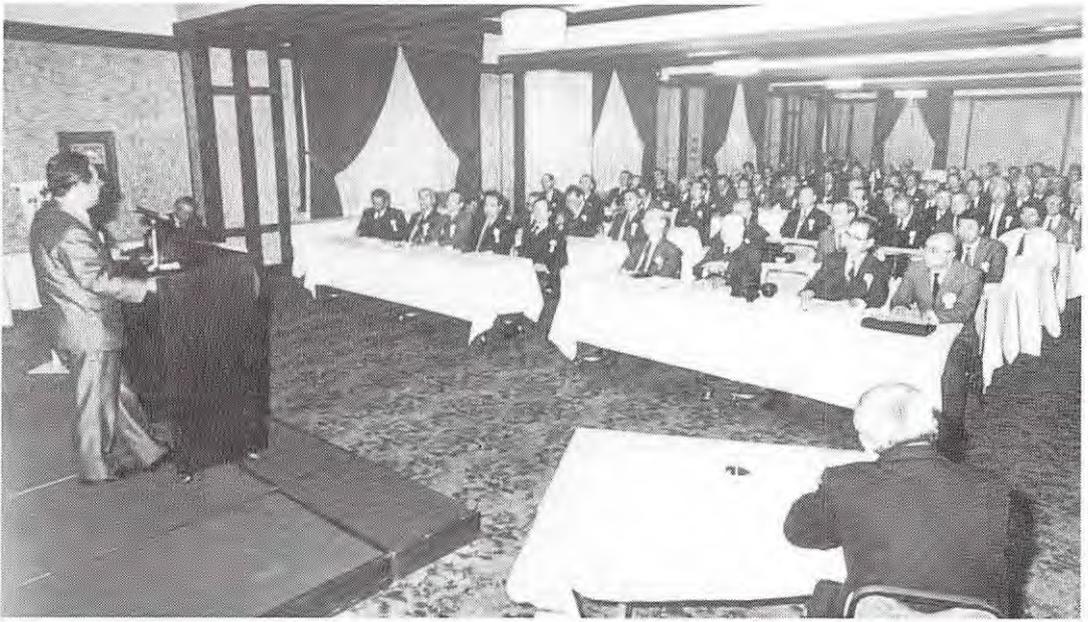
本来は鄧小平を批判したいわけですけども、  
それにはあまりにもリスクが多いし、鄧小平は何  
と云っても人民解放軍の軍事委員会主席でもあ  
り、そして先ほど言いましたように、そうまでは  
今はできないという暗黙の了解がありますから、  
一番弱い環であるところの胡耀邦に批判を集中し  
た。そして鄧小平としても、自分の責任が追及さ  
れることをかわすためにも胡耀邦を切るようにな  
っていった。言ってみれば、まさに胡耀邦下ろし  
というものがこの間の中国で急速に進んでいっ  
たわけですが、果たして先ほど言いましたように、  
胡耀邦を下ろしただけで決着がつくであろうか。  
この背景には鄧小平の改革政策そのものに対する  
根本的な批判が、原則派ないしは保守派からある  
のだということを、皆さんぜひ念頭に置いていた  
だきたいと思えます。

さて、もとより中国の鄧小平路線というものが  
順調に推移していればこんなことはなかったと思

います。ところがそこには、さきほど来申しあげ  
ておりますように、あちこちに問題があった。そ  
うであるがゆえに、鄧小平もこへきて自ら変身  
しているわけで、この鄧小平の変わり身の早さ  
というものは、やがて来るかもしれない、その可能  
性は十分あると思えますけれども、将来、鄧小平  
批判の大きな材料になっていく可能性があると  
思う。

## 胡耀邦解任の手続きに疑義

それから、手続き的なことを申しますと、今回  
の胡耀邦解任には手続き上かなりの疑義がありま  
す。まず十六日の政治局会議というものは、拡大  
会議方式でやったんです。これは毛沢東時代と同  
じことです。中国では何かあると、正規の会議で  
はなく、すぐ拡大会議で、いわば多数の力でもつ  
て押し切るということをいまでもやってきたわ  
けです。かつて劉少奇が失脚したときも、みんな  
中央工作拡大会議です。正規の中央委員会を召集  
しない限り、党の最高指導者は解任できないん  
です。何と言つても胡耀邦は総書記ですから、党大  
会が開かれるなり、中央委員会が開かれる必要が  
ありますけれども、中央委員といつても候補を含  
めますと、三百六十数名いますからこの緊急事態  
の中で全国からかき集めるわけにいかない。そし  
て、そういう緊急の事態に陥つた場合には、中央  
政治局が代行していいという規約がありますけれ  
ども、しかもそれは二十名近い中央政治局員の数  
にほぼ匹敵する十七名もの顧問委員会の長老を導  
入して、今回決めていくわけです。しかも制度的  
には、彼らは顧問委員であり、鄧小平も顧問委員  
会の主任です。十二回党大会では大勢の顧問委員  
会というのが任命され、長老は全部顧問委員にな  
った。自民党の場合にあてはめれば、数人の最高顧



中嶋教授の講演を熱心に聴く出席会員たち

問が「中曾根けしからん辞める」と言っているのと同じなんです。

ソ連でいえば、胡耀邦は制度的には、ゴルバチョフ書記長と同じ立場にある。英語で言えばセクレタリー・ゼネラルです。ですから書記長を辞めさせるのに、タナ上げになったグロムイコさんをはじめとする最高幹部会の長老たちが「ゴルバチョフけしからん。このごろやり過ぎている」と言っただけで罷免しているのも同じことであって、その点で手続き上、やつぱりかなり疑義がある、ということなんです。

ですから、もちろん中国としては抜け道を考えて「代理」ということになっており、趙紫陽首相が「総書記代理」として胡耀邦の後を引き継ぐのだという。したがって、当面、手続き上のことからいえば、できるだけ早い将来、次の七回中央委員会総会——七中全会を開くか、この秋に予定されている十三回党大会までにこの問題は決着しなければいけないというふうに思うわけです。

しかし、解任決議は拡大会議でやられていることは間違いないわけですが。彼をクビにしていまいましたから。しかもクビにした後で明らかになように、胡耀邦批判が今後も続いていくと思うんです。それだけに、今回のやり方は、手続的にもかかなり疑義がある、無理なことをやっているんだということも、われわれは知っておいていいのではないかと思います。

### 胡耀邦の後任はだれか

さて、それでは一体だれが今後胡耀邦に代わるのかという問題ですが、これはなかなか予測し難いと思うんです。しかしながら、「代理」というのは、中国の場合、次の手続きを踏むまでの暫定期間という意味がありますから、そうしますと、趙紫陽首相が一応今度の中央委員会なり党大会で「代理」として、正式に胡耀邦の後がまになるというのが、形のうえでは最も穏当な線だと思えます。

しかしながら、私自身としては、どうも趙紫陽という人あまり高い政治的評価を与えていない。従来から鄧小平＝胡耀邦体制ということは言うんですけども、鄧小平＝趙紫陽＝胡耀邦体制ということはない。それはなぜかというと、趙紫陽という人は、いわば本場のラインに立っている人ではないんです。いわばスタッフの総大将みたいな人であって、政策形成とか、イデオロギー問題とか、そういうことを含めて、党を率いていくような人だとは、私は見ていない。

そもそも彼が首相になったのは、ご承知のように華国鋒時代です。まだ華国鋒と鄧小平の勢力が均衡していた。彼が首相代理から首相になったのは、例の七六年、中国にとって非常に大きな転換のあった——周恩来の死、天安門事件、毛沢東の死のあった、あの時なんです。その間ずっと華国鋒政権があったわけですが。そして趙紫陽が首相になったのは、その華国鋒体制の末期です。このとき彼が首相になったのは、鄧小平にとっても華国鋒にとっても、この人物ならまあ妥協できるという形で、彼が首相になったんです。

というのは、鄧小平とすれば、自分の子飼いのエースであった胡耀邦を首相にしたかった。ある

いはもつと自分に近い人物がほかに二、三いるわけですから。

趙紫陽という人はかつて、鄧小平が「走資派」と批判されていたころ、つまり十年前ぐらい、鄧小平が失脚している最中で、「資本主義の道を歩む実権派」「裏切り者」「反革命分子」といわれていたころ、趙紫陽は調子にのって、四川省で鄧小平糾弾の大会などを主宰しております。ですから華国鋒にとつてみれば、まあこの人物なら大丈夫だと思つたんでしょう。

一方、鄧小平の勢力というのは、一九七八年、日中平和友好条約が結ばれた時期で、日本は第二次中国ブームでした。あの年の三中全会によって鄧小平体制というものが党内でかなり強くなつてきておりました。その強くなつた鄧小平に一番急速に近寄つていったのが趙紫陽です。かつて自分が鄧小平糾弾をしたことを忘れたかのように、そして鄧小平の政策を先取りして、四川省で積極的

### 陳雲系列の李鵬に注目

(黒板に書きながら)ご承知のように、中国の政治過程を理解するには、まず七六年というのが、例の周恩来が死に、天安門事件が起こり、毛沢東が亡くなり、そして驚天動地の北京政変によって毛沢東体制が崩れていった、大きな歴史上の転換期でした。そして翌七七年に、鄧小平は復活します。これは鄧小平にとつては、まさに華国鋒とか、汪東興というかつての中国の公安関係の元締めであった、ああいう人たちがみんな捕まえてくれたからこそ、彼だつて今があるんでなければ、そこは冷酷な政治論理ですから、やがて水と油であった華国鋒と鄧小平との対立が深まつていった。そして七八年の暮れには、三中全会によって、す

で鄧小平体制というものがほぼ党内に確立するんです。

そしてこのとき以降は、華国鋒がじわじわと追い詰められていって、八一年の六中全会では華国鋒が党主席の座から引きずり下ろされて、当時の日本人にはやはりあまりなじみのなかつた胡耀邦が党主席になる。同時に「歴史的問題に関する決議」が採択されて、六中全会では毛沢東が文書の上でも批判され、文化大革命が否定されました。そしてその上で、八二年に十二回党大会が開かれまして、さきほど言いましたように、今度は主席という言葉もやめてしまつて総書記にし、そして胡耀邦が総書記におさまつたわけです。

こういう状況があつたわけで、そうすると次の党大会は、党規約に従うと八七年でなければ、それを待たずに八五年に全国代表会議という異例の会議をやつたんです。

このあたりから今度は新しい路線闘争が始まつた。ここまではみんな一致していた。陳雲も鄧小平も、全部言つてみれば旧実権派——劉少奇路線です。

今の中国というのは、政治の表に出ている人では、毛沢東時代ならば絶対に表に出られなかつた人たちがすべて表に出て政治をやっているわけです。

そして八二年の十二回党大会では、華国鋒は平の中央委員に降格されたわけです。ついこの間のことですね。私も武道館で、大平さんの葬儀に出席して、華国鋒氏の後ろ姿を見送つたんですけれども、ああこの人は国に帰れば消えていく人だなあと思つたら、やつぱりその通りになりました。

こういう状況というものがあり、そうして今回のような事態になつてきているわけで、こうした中で趙紫陽という人が登場してきたのですけれど

も、彼はどう見ても、たとえば中国共産党内に政治基盤があるとは思えない。あるいは軍の中にか基盤があるであろうか。鄧小平はご承知のように、かつて第二野戦軍の政治委員もやっております。長征にも参加しています。そして胡耀邦はまだ少年であつたとはいへ、一応使い走りのようなことをやつて長征にも参加した。趙紫陽という人はそういうことも何もないわけです。そこへ持つてきて、彼自身は必ずしも深いイデオロギーがあるとは思えません。つまり中国の場合、首相というのは必ずしも最高実力者ではないわけで、あちこちに使い走りするにはいいけれども、どうもそれ以上の人ではないと、私は思うわけです。

しかしながらどんな政治の世界でも、あるいはどんな組織でもそうですけれども、それほどでもないと思う人が、一たびその地位につきますと、だんだんプレステイジもついてくる、威厳もついてくる、あるいは人脈も出てくるというようなことがあるわけで、この点は胡耀邦についても言えますから、やはり今後一つの候補として趙紫陽というものがあつていいふうを考えてもいいと思ひますけれども、私はいまのところで見ている限り、むしろ陳雲系列からも非常にいい、李鵬副首相あたりにかなり注目していいのではないかと思つております。

### 政治的構図に二つの流れ

今日の中国は非常に複雑な政治的構図になつていっているわけで、この辺を占うにはある種の人事配置を書いてみなければなりません。

王兆国

胡啓立

胡耀邦

鄧小平

〔黒板に人名など〕  
を書きながら

私の見方は、やはり鄧小平が中央にいて、胡耀邦はまさにその後継者であった。そしてこの後継者のところには、胡耀邦が七十代、そして五十代の胡啓立で、大変な切れ者がいるわけです。胡耀邦が総書記で、胡啓立はやはり党中央書記処常務書記。最近、日本でも胡耀邦の次の指導者になると盛んに紹介されていたわけです。

その下には四十代の王兆国。王兆国は日中二十一世紀委員会の中国側代表です。

これらは全部、共産主義青年団の系列です。

鄧小平は五〇年代に、当時の中国共産党の総書記でした。しかしながら、当時の総書記というのはいわば事務局長役で、その上には党主席もいましたし、国家主席もいた。当時は毛沢東が兼任していましたが、やがて大躍進政策の失敗以後は、劉少奇に国家主席を譲ったわけです。

この事務局長というのは、外郭団体との関係を全部取りもつわけで、その外郭団体——つまり共産主義青年団の第一書記が胡耀邦であった。

そしてその後、胡啓立も共産主義青年団の指導者になった。彼は、かつての中華全国学生連合会の主席です。

しかもその後、今度は王兆国などが出てくるわけです。彼も共産主義青年団でして、これらはみんな赤いエリートです。

こういう赤いエリートというのは、鄧小平が考えていた一つの人事構想であったと思うんです。これは間違いありません。

だからこそ彼は、胡耀邦を抜てきし、彼が日本にきても胡耀邦を持ち上げたりしていたわけです。また日本の政治家が中国に行けば、「胡耀邦」「胡耀邦」と言っていたわけです。

一方、こういう赤いエリートたち——まあ社会党でいえば、労働組合出身の「青年将校」みたいな人びとに対して、党人派の人たちはやつぱり面

白くない。

この党人派の人たち、たたく上げた人たちの総大将に、同じ旧実権派ですけれども、陳雲さんがいるとみていいでしょう。彼は昔、職工だったんです。そして労働運動をやり、ずいぶん苦労して、そしてロシアに留学し、そしてここまで来た人です。

さきほど申しましたように、鄧小平と並び称せられる人ですけれども、自分自身がナンバー1になろうとしないだけに、非常に信望も厚いといわれています。ですから、もし中国で無記名の選挙が行われたら、鄧小平ではなくて、陳雲がトップに立つんではないか、私はそう思います。

陳雲

李鵬

この陳雲の系列には、李鵬という人がいるわけです。一部には、李鵬は改革派とみる向きもありますけれども、私は、それほど旗幟鮮明でないにしても、非常に忠実な陳雲グループとみております。

彼はもともとロシア留学組で、テクノクラート出身ですが、ここところ大変活躍しています。

陳雲以下、ソ連留学組がこのところ中ソ関係の改善とともに、中国共産党のあらゆるところで伸びてきているということも注目すべきでしょう。

それは最近、たとえば武漢の鉄鋼コンビナートに再びソ連がカムバックして援助するようになった。それらのことと並んで、あるいは中ソの最短距離の鉄道建設——昔、日本軍が悩まされた新疆ルートを通じてカザフ共和国に抜ける最短距離の鉄道建設に、いまソ連が全面的に出てきている。これらはみなこのラインです。

それから、経済運営では、姚依林という人。

これらの人たちは、日本の政治家が行っても、陳雲なんかは絶対に会いませんし、財界人もだれ

建設関連国内外エンジニアリングサービス

(計画・設計・施工管理)

(有)ユニテックコンサルタント

代表取締役 富 樫 利 男

〒170 東京都豊島区東池袋 1-48-10 第25山京ビル 4 F

TEL 03(980)3756

も会えない。

私はかねがね、中国の経済というのは、あの八一年初頭のプラント・キャンセルのときもそうですけれども、あれは八〇年の暮れに日中閣僚会議が初めてありまして、私の記憶では、日本からは当時の中川一郎・科学技術庁長官、渡辺美智雄・通産大臣、園田直・外務大臣が出席しました。その際、中国はこんなにプラントをたくさん買っているけれども大丈夫でしょうか。確かめてきていただきたい——ということをおし上げた。

そのころ、閣僚会議のレベルでは、向こうから出てきたのは谷牧さんですが、このごろなんか名前も聞かなくなっちゃいました。

その谷牧「いや、絶対大丈夫」と言っていたけれども、その閣僚会議が終わった直後に開かれた中央工作会議——この工作会議というのもよくやるんですが、これは一種の非法会議なんです——そこで陳雲が「こんなに日本からむやみやたらにプラントを導入していいのか」という彼の一喝によって、翌年の一月下旬からプラントをキャンセルしてきて、そして日本企業はしぶん困ったという。

そういう人物であるだけに、陳雲さんに会ってきてほしいというふうに言うんですけども、だれも会えませんね。

そして日本から中国に行くと、いつも中国が日本に向ける顔としか会ってこない。そこに日本の対中外交の底の浅さがあると思うんです。いつも日本に向けていい顔をする、今回のような事態になると、後でもっと詳しくお話ししますけれども、問題は大変深刻なことになるわけです。

これらの人たちは、恐らく、陳雲も八十二歳ですから、彼の経歴を汚さないためにも、西側の指

導者——アメリカや日本の指導者なんかとは会わないという点で、まさにオールド・ボルシェビキとしての生涯を貫くでしょう。

### 革命中国の理論では陳雲グループが正論

しかしながら、ソ連から、たとえばアルヒポフ副首相なんか来ると、本当に「同志よ、よくきてくれた」という形で、もう抱きかかえんばかりの応接をしていることを忘れてはいけない。北朝鮮からきてもそうです。そこはやつぱり社会主義者、共産主義者同志なんです。

ですから、中曽根さんをいかに歓迎しようとしても、それはあくまでも客人としての歓迎であつて、ソ連の代表がきたときは、もう内輪同士の宴(うたげ)をやっているわけで、この内輪同士の宴をやっている部分に、こういういわば「知ソ派」の人たちがいるということも、同時に忘れてはなりません。

これらの人たちからみれば、中国共産党の党規約を読み、憲法を読んでも、どう見ても、鄧小平や胡耀邦や、これらの人たちがやっていることの方がおかしいんですね。

そして、中国共産党がマルクス・レーニン主義を掲げる限り、それをもう全部下ろしてもう共産主義はやめたといつて、複数政党制にして、福建省や広東省は「経済特区」なんていわずに、台湾や香港と同じように完全に資本主義にするのなら、話は別ですが、私はそういうふうにするれば、中国も発展すると思うんですけども、それはやつぱり今の中国では絶対にはできない。

そういう、いわば拘束がある限り、やはりこちら(陳雲グループ)の方が正論なんです。日本から見ると、こちら(鄧小平・胡耀邦グループ)の方がいいから、みんな期待するけれども、

マルクス・レーニン主義を掲げる革命をやった、革命中国の論理からすれば、陳雲グループの方が正論なんです。

しかも鄧小平に対する、アンチ鄧小平連合というのはいわば非常に敵が多いんですね。これはむしろ政治の論理というよりもいわば非常に生臭い人間関係からして彼のマイナスになっている。彼はいま非常に頑張っている。だけれども、一たび彼がみまかったり、あるいは今後窮地に追いやられたときに、果たしてだれが鄧小平を最後まで守るだろうか……。

まず敵が多い一つは、仲間からの信頼も必ずしも高くない。たとえば、同じ仲間には、彭真のような、したたかなかつての実権派がいます。彼は全人代(全国人民代表大会)常務委員長で、中国の民主化、法制化——その点では一致している。だけれども、鄧小平や胡耀邦みたいな、そんな種の緩んだことはいやだ、と言っているわけです。これら彭真につながる人たちが、今回の事態では非常に目立って活躍していました。

活躍が目立つのは、鄧力群というイデオログ。ソ連でいうと、かつてのスターロフのような人です。こういう人が非常に頑張っています。

それから、「中国共産党の三十年」という著作などで有名な胡喬木。この人も今回、ずいぶん頑張っています。

それから、昔なじみの深い名前前で、経済にも強い、薄一波。こういうみんなロートルがこぶしを振り上げて「こんな学生デモを許すとは何事か」と言っているんです。

それから、中日友好協会の名誉会長にもなり、日本に来れば盛んに日本人にお世辞をたれるんですけども、中国の中では、今回ももうこぶしを振り上げて「こんな民主化運動をやらせてけし

らん」と言った、王震。

これらの人たちはみな、ある意味では陳雲ともいいんですけれども、やっぱり彭真なんかの影響が依然強いと思うんです。

## 周恩来をにらみつけた鄧小平

それから、李鵬副首相は、周恩来と姻戚関係にもなるだけに、周恩来グループからしてもいいわけです。

周恩来グループというと、いま残っている人ではやはり李先念です。この李先念の上には、この間亡くなりましたけれども、「おれの目の黒いうちは鄧小平の思いどおりにはさせんぞ」と言つて頑張つていた、軍の長老、葉劍英さんいました。

この周恩来グループにしても、このところ全部タナ上げされちゃっているわけです。

さつきの谷牧なんかの名前があまり聞かれなくなったのもそうなんですけれども、そもそも周恩来という人の評価が、鄧小平にとつて非常に困つた問題なんです。文化大革命を否定し、毛沢東モデルをすっかりひっくり返しちやつたのは鄧小平さんです。しかしながらだれでも中国の民衆は、周総理は粉骨砕身して毛沢東にかけた。紅衛兵運動で一生懸命やつたことを知っているわけです。その毛沢東的なもの、文革的なものを一切否定しなければいけない立場からすれば、周恩来を高く評価することはできない、という論理が出てくる。

これは私が、たまたま記念すべき場面を見ている数少ない日本人の一人ですが、いまから二十年余り前の一九六六年十一月、孫文生誕百周年記念の行事が中国でありまして、そこに列席しました。

そのときはまだ文革とは何なのかわからなかったんですが、街頭はもう紅衛兵が熱狂的なドラマを繰り広げていた。そして北京の人民大会堂で周

恩来が最後に演説に立ちまして、「いかなる功績がある革命家でも、晩年において毛沢東主席に背くやからには末路がない！」と言つて、彼は赤い毛沢東語録を掲げて「毛沢東万歳」を絶叫したわけです。それを聞いて私自身の周恩来像はガタガタと崩れていってしまったんですけれども、この瞬間は実は周恩来にとつても大きな岐路であった。

そのとき、劉少奇さんはすぐ私の目の前のひな壇で顔面蒼白でした。人民大会堂の中は、日本の国会議事堂と同じようなものですから、禁煙になっているんですけれども、壇上でたばこをたて続けるかと思つていました。本当にイライラしていただろうかと思つて、中国のひな壇には必ずお茶が配られています。そのお茶のふたにたばこの吸殻をなすりつけて、たて続けにたばこを吸つていた。そのときの鄧小平さんの顔を見まして、私は写真にとつてきてあります。それが「ニューズウィーク」とか「アサヒグラフ」に出ているわけです。「いまにみている」という感じで、あのもともと中国の特殊な種属集団である客家（ハッカ）出身の、風変わりな風貌の鄧小平さんですが、その彼がものすごい顔で周恩来をにらみつけていました。そのある種の怨念が、「最近の周恩来評価にやっぱり出てきていると言わざるを得ません。彼自身、のちに周恩来に救われたようなものですけれども、周恩来についていまの中国はあまり評価しなくなつた。

ですから、その辺を知らない方が中国に行つて、「古い井戸を掘つた人に乾杯」と言いますと、この二、三年特にそうだったんですが、いやな顔をしましたね。自分は鄧小平さんの弟子です、と。周恩来の弟子ではない、ということと言わんばかりですね。

そういうふうに変わつてきていたわけですか

ら、それらの人たちにとつてもやっぱり面白くないんですね。鄧小平さんに対しては……。

## 軍と「反鄧小平連合」の動向

それからもう一つは、軍の人たちです。今回、中国で軍があまり大きな役割をしていないということはその通りで、あまり軍がどうなるかというふうに見えるのは考え過ぎであるような気がいたします。というのは、徐々に中国におけるシビリアンコントロールが、鄧体制下で固まつてきている。だけれどもそれは軍の人には不満ですね。

最近中国では、人民解放軍兵士の人気が非常に落ちていいる。そこへもつてきて百万人兵力を削減する、予算もカットするという状況ですから。楊得志とか、余秋里とか楊尚昆なんていう、これまた文革の時に非常に悲しまに言われた人たちが軍の中にいますけれども、こういう人たちにとつても、鄧小平はあまり歓迎すべきではないと思つてんです。

ですから、ちよつと状況が動いてくると、周恩来系、あるいは軍人、それから陳雲系列と彭真系列、こういう人たちの「反鄧小平連合」というものがどういふふうになるかわからないというのが、現在の中国の政治体制だとみていいと思つてます。

それで、辛うじてここ（鄧グループ）に残っているのが趙紫陽です。ですから、彭真と並ぶぐらいの位置で、改革派の方にあるのが趙紫陽なんですけれども、果たして趙紫陽で持ちこたえられるかどうかです。

鄧小平は、こちら（胡耀邦）のグループを切つてしまった限り、その点では彼自身も非常にジレンマが深い。それで趙紫陽系列とすれば、最近日本にきた田紀雲とか、それから趙紫陽ともよくて、

もともと共産主義青年団出身である喬石とか、万里副首相とか。それから天津市長の李瑞環なんていう人もいるわけですけども、どうみてもこれらの人たちが今後の中国を背負っていかれるかどうか。しかも鄧小平亡きあとということを考えますと、かなり不安が多いと言わざるを得ない。



激変した中国情勢の展望を話す  
中嶋教授

以上で、私の最近の中国の政治情勢に対する見方を、ざつとばらんにお話ししました。

### 今後の対外関係

さて、そこで今回の事件が日中関係なり中ソ関係、あるいは中国の対外政策にどう響くか、あるいは香港、台湾にどうかかわり会いを持つてくるかということ、次にお話ししたいと思います。

まず日中関係についていえば、当面非常に厳しくなる。厳しくなるどころか、中国の最近の政変といい、内部分裂といい、この極めて重要な影響というか、日本の影響というものがかなり大きかったのではないか。その点では、極言すれば日本にも責任があると言つていいでしょう。

なぜならば、日本はこの間、一種の中国ムード、中国ブームの中で、たとえば政・財・官界は、われもわれもと中国になびいて行つたわけです。そして一時は確かに中国は開放体制で物を買いましたから、それいけ中国とばかりに、テレビが売れたり、自動車売れたというところ、ワーツと殺到します。売れたといつても、一人当たりのGNP(国民総生産)は、日本人の四十分の一で、せいぜい二五〇ドルから三五〇ドルがいまの中国の平均です。ですから、何もそこにそんなに大挙してテレビを売ることはないんですけども……。まあ、しかしながら十軒に一軒くらいはテレビが買え込んでしよう。

### 人民公社の解体

さきほど言いましたように、農村の人民公社をやめてしまつて生産責任制にしたわけです。生産責任制にしたということは、いわば個人農業。旧中国の農民のカオがそこにワーツと出てきたわけです。そして彼らは、確かに鄧小平の政策のおかげで、人民公社の軛(くびき)から解かれました。中国といえは「人民公社」と言つた、あの人民公社というものは、まさに毛沢東中国、革命中国、社会主義中国のシンボルであつたけれども、去年の一月一日を期して、もう人民公社は一切なくなつちやつたわけです。

ですから皆さんも中国に行けば、必ず人民公社の見学というものが入つていましたね。今はもう人民公社は見ようと思つても形さえもないわけです。

それで、人民公社は確かに解体しました。これは確かに早かつたと思うんです。なぜなら、人民公社というものがいかに中国の農民にとつて抑圧であつたか。日本の教科書などはつい最近まで、

私めいぶんいろいろこの点では文句を言つたんですけれども、人民公社によつて「中国の農村は様相が一変して農民が本当に生き生きと生産にいらしてゐる」とか、「農業生産が増大した」とか書いてありましたが、これは全くのウソであつたんですね。

そもそも、この間まで隣の李さんであり、陳さんであつたものが、共産党の幹部であるがゆえに、人民公社の管理委員会というところで朝から晩まで机に座つていて帳簿ばかりつけている。彼らもう自分たちと同じように畑も耕さない。そういうまさに帳簿だけをつける階級をノーメンクラトゥーラ「赤い貴族」と言ふんです。各村々に赤い貴族が出てゐるわけですから、農民は働く気にならない。

しかも、一生懸命働いても、国家に吸い上げられる。吸い上げられる場合に、いいお金で吸い上げてくれるならともかく、しばしば流通価格よりも低いわけですから、それはもう働く気にならない。そしてその幹部、つまり赤い貴族たちが特権だけを振り回している。これじゃあ、旧中国の租税取立人とどこが違うか、という感じになるわけです。

こういう状況の中ですから、人民公社はあつたという間に解体してしまつた。本当に人民公社が農民のために役に立つていたならば、恐らく各地で抵抗が起つたことでしょう。ところがサーツと人民公社がなくなつていった。

そこまではよかつたんです。そして生産請負制もよかつたんですけれども、そうすると今度は同じ人民公社でも、都市近郊の、いろいろ工芸作物なんかができるところはかなりいいけれども、辺鄙なところはどうしようもない。土地が不毛なところはどうしようもない。あらゆるところで貧富の差が出てくる。そして旧中国の農村みたいなも

のが復活して個人農業になりましたから、一生懸命働いて創意工夫をする。そこはまさに中国農民の得意な生活の知恵ですね。そういうことは非常にうまい。そういうところは非常に活況を呈してきて、いままでは鶏も鳴かなかつたのが、鶏も鳴くは、アヒルは鳴くは、ガーガー、ワーワーうるさい、皆さんが想像するような中国の農村がウワーツと顔を出してきたんです。

## 向銭看と走後門

そこまではいいんですけども、そういうふうにするために、いわば鄧小平の政策というのは二つの柱から成っていた。一つは経済の活性化、もう一つは対外開放です。この経済の活性化という点では、人民公社を解体して、中国の農業生産のほとんど大部分を占めるそこを流動化し、活性化させたわけですけども、単に制度的に緩めただけではなくて、大幅に国家の統一買付け価格を上昇させた、値上がりさせたわけですから、農民はかなりお金を持ち始めた。お金を持ち始めて、それで日本のテレビをワツと買う。だけれども実際には十軒に一軒くらいで、その家族もみんなが共稼ぎでやってようやくテレビが買えるんですけれど、そこにテレビを売り込んだ。

そうすると今度は、農民にたくさんお金を出したのはいいんですが、農作物の統一価格がこのところ急激に高くなりましたために、国家財政がものすごく赤字になる。中国の国家財政は、歳入・歳出それぞれ約二千五百億元くらいなんですけれども、そのうちの五百億元くらいが赤字で毎年々々累積してきたわけです。このあたりからもう陳雲なんかは眉をひそめ出したわけです。

そして当局は何をやったかという、赤字を補

填するために、はじめは慣れないのに、公債を発行したり、中国人民銀行から政府が借り入れていた。それから日本にまできて、日本の金融機関に円建て公債を募ったりしてお金を集めようとしたけれども、それはしれているわけです。そこでやったのが人民元の増発。どんどんお札を刷ったわけです。人民元はいくらでも刷れますから。交換性がないわけですから。したがってその結果ものすごいインフレになり、消費性向がおおられ、同時に急激に農民たちが旧中国の農村に戻っていった。

つまり、毛沢東時代に。あれほど長い間、社会主義、マルクス・レーニン主義を掲げたけれども、中国社会というのはいわばマルクス・レーニン主義から一番遠いような社会、そこを党の権力で固めているに過ぎないわけです。ですからものすごい金銭マインド——急にみんなが「お金」「お金」と言い出したわけです。それを中国語では、「向銭看」(ジャンチェンカン)——銭に向かつてものを見る——拜金主義と言います。お金にならないとどうしようもないような風潮が、この二、三年生まれてくる。

そしてもう一つは、あの中国社会ですから、そうなりますと、自由になったのはいいけれども、そう簡単にすべてが順調にいくわけじゃないんで、何かにつけワイロ、裏口。「走後門」(ツォウホウメン)——つまり裏口主義です。こうして拜金主義と裏口主義が跋扈(ばつこ)する。これをとらえて「不正の風」というわけです。こういう不正の風を糾弾し始めたのがこちらの、いわば左の原則派ないし保守派の人たちです。

## 経済特別区の現況

こういうふう国内の経済改革がうまくいって

いない。それで対外的にはどうかというと、経済特別区、たとえば香港に隣接している深圳(しんせん)、ああいうところをみてもおわかりのように、これもまたうまくいっていない。

なぜうまくいかないのか。根本的にはこういうことがあると思うんです。経済特別区をつくったり、開放都市をつくったりするけれども、それは言ってみれば中国は外貨を稼きたいから、他人の権で相撲を取ろうとした。日本から合弁企業を誘致する。百パーセント日本の資本でもいいですよ。あるいは合弁の場合、ファイティ・ファイティでいいですよ、と。はじめは五年とかいつてたのが、最近十年、十五年でいいですよ、と。

だけれど、結局合弁企業をつくって、日本から技術や資本を持っていつて、中国側は安いはずの土地・建物をべらぼうに高い値段で提供して、ファイティ・ファイティで出資したことにするんです。そこでは確かに労働力が安いですから、まず安いコストで生産する。さて生産した品物を中国国内に売っていいかという、ダメだという。これを外に売って外貨を稼いでくれというのが、経済特別区なり、合弁企業の根本的な中国のやり方です。

ですが、日本から中国へ行く場合には、やはり将来は、最近、円高であればなおそうかもしれないけれども、中国をマーケットとしたいから進出するんですよ。ですから、日中経済関係というものは、根本的に利害が対立しちやっっているわけです。そこをはじめは日中友好とか、「祝儀相場」ご祝儀外交でよかつたんですが、いつまでもそういうわけにいきませんから、そこで問題が出てくる。とにかく中国はそこで外貨を稼きたいんですね。

ある企業のことを申しますと、深圳の三洋電機。これは数年来中国側にモデルとして、「三洋」三

洋”と盛んにほめられていたんです。その重役などもそのことをしきりに自慢していたんですが、最近訴訟が起こつて大問題になっている。

どういうことかというところ、経済特別区の一帯に「蛇口」というところがあります。この珠江デルタは南海油田が出るというので、いろいろ日本の企業も投資したり、三洋電機も工場をつくつたりしていたんですけれども、全然石油が出ない。そこへもつてきて、中国側は労働者を斡旋するんですけれども、一種の人頭税みたいなものを取る。斡旋料を取るんです。その斡旋料を取られるのは仕方ないのだけれども、それは契約上にあるんです。そこで三洋電機がつくつたテレビなり電気製品というものが、中国国内になかなか受け入れてもらえない。

すつたもんだの末、ようやく中国国内にもある一部分は売つていいということになつて売れ始めたんですが、その代金は人民元で払うんですね。人民元で払われたつて実は困るんです。ですから三洋電機の方は、人民元がたまつたから、その人頭税みたいな労働者の斡旋料を人民元で払いたいと言つたら、それは困る、外貨でくれ、と言ふ。そこでトラブルになつちやつていっているわけです。

### 中国は簡単には変わらない

ご承知のように、社会主義圏のルーブルにしても、人民元にしても、これをもたらつたつて本当に困りますよね。ぼくなんかもソ連へ科学アカデミーの招待で行つて、十日間の費用として確か四〇〇ルーブルなんかもらつたけれども、時々ソ連にも行きますから、もうそんなにお土産は欲しくないし、お土産を買ふ気はないし……。そうかといつて交換できないわけですから、本当に困つて、たまたま息子がロンドンにいましたから、毎日の

ように国際電話をかけてルーブルを使つて、ようやく消化したようなもんで……。人民元をいくらもらつても困るわけです。

現在、中国の外貨準備は三十億ドルもないんですよ。そこまで外貨も減つてしまつた。これはある意味で、急速に中国と経済的にかわりを持つたところとした日本の責任でもあると思います。宝山製鉄所でもいろいろ問題が起こつて、第一期工事が去年ようやく決着したのですね。

ああいうものをつくるよりは、むしろ上海の黄浦江のところにまだ橋が一つしかないわけですから——昔のガーデンブリッジですが——あそこにもつと橋を架けてあげるとか、地下鉄をつくつて交通網を整備するというにでもすればよかつたと思うんです……。当時の財界は「一点豪華主義」で、ワーツと出て行つたんですね。そして中国側でそれに一番踊つた人たちはやっぱり胡耀邦らの人たちだつたんですね。特に中曽根政権になつてからは、中曽根さんもかなりこのグループに期待をかけた。そして日中二十一世紀委員会、胡耀邦がしよつちゅう出てきて、中国側の四点の意見——あの藤尾問題にも関連して、私は『文藝春秋』の新年号にも書きましたけれども、日本人としてはやつていけないことを、向こう側の論点で主張したわけですね。『日本の一部の軍国主義の頭目』それだけが悪いのだ、と。靖国問題でもそのことを言う。同委員会はそういうものを拝聴する機関になつた。そこへ胡耀邦が出てきてやる。

そしてこの日中二十一世紀委員会の実質的な陰のプレーンは胡啓立です。彼は今回も非常に窮地に立たされている。そして胡啓立の下にいる王兆国が名目上の中国側の代表になつていふ。ですから、この中曽根政権下でつくられた日中関係のパイプというのは、もうほとんどズタズタになつ

た、と言つていいでしょう。

しかも中曽根さんは、よせばいいのに皆さんご存知だと思いますけれども、昔からよく言うように、「君子の交わりは淡きこと水のごとし」といふ、「小人の交わりは甘きこと醴れいのごとし」と。醴というののは甘酒のことです。これは莊子が言つた言葉ですけれども、中曽根さんが「家族ぐるみの付き合い」なんていうのを自慢するのはよくないですね。中曽根さんも君子たるもの、もつと「淡きこと水のごとし」と、淡々としていただけばよかつたんですけれども、そういうことで胡耀邦一家と家族ぐるみの付き合いをされたという。

私がつい最近会つた、前中国大使も「自分は胡耀邦さんたちとは、もう家族ぐるみの付き合いだつた」と。「いま日中関係は本当によくいつているし、何も問題ない。日中友好も非常にうまくいつているし、中国はもう鄧小平、胡耀邦体制で、もう二度と動揺することはないし、現代化、近代化にいくだろう」というようなことを盛んに言つていました。

私は、日本政府がこんな甘い分析をしていていいのかなあと思つた。目に見えているわけですから、路線闘争が……。

ですから、そういう形で非常に樂觀的に、中国ないしは中国情勢というものをみなしてきたと思ひますね。

ともかく中国というのは非常に複雑な社会で、しかもあれほど毛沢東思想を掲げて三十年間もやり、文化大革命も十年間やって、そんな社会がちよつと二三年ポリシーを動かしただけで急激に変わるはずがないんですね。表面的にうわべだけはスイスイ変わつてきますけれども、ほとんど中国社会というのはそう簡単には変わらないし……。

## 表面的に中国を見てはならない

私もつい最近久しぶりに北京に行ってきた。それまでの間、深圳にはしばしば行きましたけれども、鄧小平開放政策が進んできている状況の中では、ちよつと中国に行っていないませんでしたし、中国に行きましても北京へは行かなかった。そこで、本当に目をサラのようにして上海とか、北京とかを見てきたんですね、ほとんど変わっていないんです。

確かに、ビルが出来たとか、ホテルが出来た。だけどそこは普通の中国人は入れないわけだけ。北京の「長城飯店」は確かに近代的なビルだけれども、一泊五〇〇元もする。まあ五〇〇元といつたって、日本人にすれば、円高でもあるから、せいぜい二万円前後で、東京のホテルと違わないんじゃないか、というんですけれども、中国人にすれば五〇〇元なんていうのは一年分の給料です。からね。そんなものを一泊だけに使うような社会というのは、全く彼らの日常と隔絶したところであって、そういうところとか、またファッションがあちこちに出始めているのがニュースになるという事は、それだけ珍しいからニュースになるんであって、私も上海で一生涯命ニュースのファッションがどこにあるかと目をこらして見たいんですけども、一度もそんなものにはおつきりませんでした。

そういう表面的なことはともかく、中国社会の根本は、毛沢東時代でさえもそう簡単に変わらなかつたんですね。こういうことをやはりきちんと押さえておかないといけないわけで、簡単に「中国」というものを見下してはならない。何か非常に表面的に中国というものをみて、うまくいつているというふうに考えたところに大きな問題があつた

と思うんです。

## 中曽根失言

つい最近、中曽根さんは、よせばいいのに、「藤尾問題」で訪中した際にも——これは実際には藤尾問題の陳謝に行ったわけですね。表面的にはどういうことかという、中日青年交流センターの定礎式に出席されたわけですね。この定礎式のときに中曽根さんはものすごい「アジア演説」をやっている。

十一月上旬は、もう中国国内はこういう問題で非常に対立が内部でヒートしていたときなのに、中曽根さんは何と演説したか。青年を大いに持ち上げて、青年たちは、青年は人類進歩の原動力である。わが国の明治維新は、多数の若者がわが身を顧みず保守派と戦い、わが国を封建国家から近代国家へと脱皮させた壮絶なドラマであつた——なんていうことを言ったのです。ただでさえも藤尾問題で余計なことを言ったと思つているのに、あの時期に中曽根さんが訪中する必然性は全くないと思うんですね。藤尾問題で陳謝したというけれど、本来戦後の総決算をするならば、いま日本が中国よりも社会的にも経済的にも比較的優位に立っているにもかかわらず、何かあるたびに中国の主張に屈して頭を下げなければいけないという、こと、外交に関してはいつも「位負け」しているという、そういうところをはつきり清算することが、次の世代に本当の意味のフランクな日中関係をつくっていく大きな政治家の役目だと思つたんですね。

それをせずに、また何か言えば頭を下げるというパターンを作ってマイナスイ〇〇点、そこへもってきてもう一つのマイナスイ〇〇点は、いま中国で改革派がこうやって保守派に追い詰められて

いるときに、胡耀邦さんを前にしてこんな演説をしたことです。という中国は、中曽根さんの中国認識、日本の外務省の中国分析がいかにお粗末であつたかということですね。こんな発言は避けるべきです。まさに中国内政にコミットしている。

これを聞いた胡耀邦さんは非常に困つたと思つたでしょうし、同時に王震中日友好協会名誉会長とか、そういう保守派の連中は「何を言うか」と。「そこまで胡耀邦は思ひ上がつていのか」というふうにも見たわけです。それが証拠には、今回の胡耀邦の罪状の中に、「日本に媚び過ぎた」というのがあります。

そして「媚び過ぎた」だけではなくて、「胡耀邦は現代の汪兆銘である」という。皆さんにはもう汪兆銘というのは解説しなくともおわかりですが、若い学生には、どういう人が解説しなければいけないんですけれども……。「現代の汪兆銘だ」ということがささやかれていた。私の耳にも聞こえてきていたわけです。

そういう状況の中でいまのような演説をされたということとは、これは隠された重大な、第三の中曽根失言であつて、単に例の知識水準発言だけではなくて、ここにもう一つの重大な失言があつたと、私は考えております。

その意味でも中国側は非常に厳しくなるでしょうし、その厳しさは、すでに竹下さんが行つたときに、GNPパーセント問題でけんもほろろの応対をされたというところにも出てきています。その点でも中国は今後日本に対していろいろなることを言ってくるだろうと思つています。

## 日中貿易のトラブル

それから日中貿易などをみますと、実はいまも貿易上のトラブルが非常に多くなつてきており

ます。私はそういうものを調査する、日本の一流企業や商社が集まっている会の議長を仰せつけられまして、いろいろなデータを調べているのですが、この日中間の貿易上のトラブルだけでも恐らく三、四千億円に上っていると恐れられますし、今後ますます増大するでしょう。

こういうトラブルがありますと日中関係も厳しくなる。しかも中国は外貨が不足していますし、日本は思い上がって成り金だと思っているわけです。

### 請客・回請・還席

そうしますとやっぱりいろいろ言ってくるんでしょうね。まさに中曽根さんとしても、戦争責任の問題も含めて、われわれはなにも——「開き直れ」ということは言うつもりはないけれども、しかしながらもつと合理的な日本人の立場として、やっぱりきちんと主張することにおいて、この問題をはっきりさせるべきだったと思うんです。

にもかかわらず、中曽根さんにおいてさ藤尾さんをスケープゴートにすることによって問題を糊塗したということにおいて、私は非常に日中関係をマイナスであったと思う。そのマイナスをかりにしのんでも、相手がちゃんと、胡耀邦とかそういう人がずつと今後、中国と日本の友好を保つてくれるならともかく、その相手は、中曽根政権の対中政策のためであって失墜してしまっただけです。そしていまや「現代の汪兆銘」などといわれている。こういう問題が出てくるわけですね。

もう一つ卑近な例で、私、自分がかかわったことですので、申しあげさせていただきますと、日中友好のために三千名の青年が中国の建国三十五周年記念に八四年十月、行きました。二年半くら

い前になりますね。

これはご承知のように、八三年秋に胡耀邦が日本にきて、NHKで青年のために演説をして、「二十一世紀は青年のものである。青年たちよ」と言って手を振り上げて、日本から三千名の青年を招く、と言ったんです。

これなども日本政府はやつぱり慎重に対応すべきであった。なぜならば、そもそも中国人から招かれたときに——皆様方のように本当に中国に詳しい方々の前でそういうことを言うのは口幅つたいんですが——なにもすぐに応じなくていいんですよ。「三顧の礼」というように、三回招かれてようやく腰を上げれば相手にも尊重されるんですよ。ところが、中国が三千人招くというと、日本政府はホイ行けとばかり、またあの友好ムードに乗ってやつちやつた。

そのとき私は、藤波官房長官にもはっきり申しあげましたし、外務省にも申しあげたんですけれども、いま日本と比べると、中国は一人当たりのGNPが四十分の一である。まだまだ経済水準の低い中国が三千名の日本の青年を招くということは、そこに中国なりの戦略なり戦術があるにせよないにせよ大変なことである。それに軽々と乗るべきではない。そんなことをすると必ずあとで相手方に迷惑をかけることになる。もしもこれに乗るといふならば、少なくとも渡航費だけは日本側が持つべきではないか。滞在費は、招かれたんだから相手国に持つていただいてもいいだろう。いまの日本の学生や若者たちはお金を持っていますから。しかも中国民航機の団体旅行ですからせいぜい十万円くらい負担すればいいわけですし、ね。そういうふうにするべきだということを申しあげました。そして、もしそれが不可能ならば、日本側は三千名の中国の青年たちを日本に招くだけの予算措置を講じて下さい。そのうえで初めて応ずべ

きではないか、と。

昔から中国には、お客を招いたら招き返すというしきたりがあります。「請客(チンコー)」と「回請(ホエチン)」という言葉があり、後者は「還席(ホアンシー)」とも言っているんです。これをすべきである。

ところが当時の友好ムードの中で——藤波さんも、私は個人的には親しくしていただいたわけですからけれども、私の意見を聞いてくれませんでしたし、当の外務省も残念ながらそういうことには関心を持たなかった。とにかく三千名を送っちゃったんですね。

そしてどういう結果になったのか……。今度は中国側が——そこは中国側も人を招いておいてそんなことを言うべきではないんですけれども、日本の青年たちはなにも中国へ戦争責任を謝罪にくつつもりはないわけですね。新しい中国をフランクに見てきたかつたんです。だもんですから非常にナウイ感じで街を闊歩していた。それがけしからんというわけです。日本の青年たちは何ら戦争責任を感じていない」と。

そういうことになりました。同時に、一昨年のデモのときにもすでに出ていましたけれども、あの三千名の青年たちは何のために来たのかと、いうことになった。それで各地に南京虐殺資料館などが出来ていったのは、日本の青年たちへの見せしめのためであったわけです。それでは何のために日中友好青年交流だったのか、ということになりますね。

そこへもつてきて、最近、胡耀邦の罪状の一つに、教科書問題、靖国問題が非常にシリアスなときに、日本に媚びて三千名も青年を招いて国費のムダ遣いをしたということが、現にいま中国で出てきている。

ということになりますと、あのときにむしろ私

の忠告を聞いて下されれば、私は専門家の立場から見えておりましたから、それを聞いて下されば、これほどまでに胡耀邦を窮地に陥らせることはなかったと思います。

## 中国の近代化は二十一世紀

今や中国の最大の経済的な相手国は日本ですし、やっぱり日本の責任というのは非常に大きいと思うんです。そういう状況があればこそ、逆に今回の事態は対岸の火災視してられない。しかもこれは今後台湾とか、香港などにも非常に影響を与えていると思います。

当面、香港の人たちはほとんどショックを受けていますね。ますます香港からの資本が逃げていくかも知れない。自分の後継者として指名したような人も切るといふような政治的不安定があるだけに、やはり鄧小平時代に約束された香港の将来というものがどうなるのか。鄧小平ワンマン体制だと一般に思われているが、こんなに中がガタガタするということであれば、一体、鄧小平以後どうなるのか、状況はどうみても非常に厳しいというわけです。

そこへもつてきて、問題は、今後中国の経済政策が、かりにポスト鄧小平時代に、非常に安定的に推移したとしても、一人当たりGNPが、よくいって今世紀末に一〇〇〇ドル。日本はいまや一万ドルですから今世紀末には二万ドルになるといわれているわけです。そうすると、日中間の一人当たりの経済的格差はますます大きくなる。

台湾は、最近アメリカとの貿易が黒字になっていて、アメリカから元(ゲン)高の要請に対して元を切り上げてきていますね。ですから一人当たりGNPは、もう実質四〇〇〇ドルを超えています。香港はもう二年ぐらい前に六〇〇〇ドルを

超え、シンガポールもそうでしょう。韓国も二五〇〇ドル近くになりました。アジアの儒教文化圏はいずれも経済は非常にうまくいっているんです。

とくに、この中で台湾、韓国がよくて、最近ちょっとシンガポール、香港にかけりがある、不安があるわけですけれども、こういう状況を考えて、今世紀末、中国大陸だけがすぼつと落ち込んでいって、七パーセントぐらいの成長を続けたと仮定しても、そういう将来です。

そうすると、中国の将来が、いまの台湾や香港が数年前に通過したように、そして私がよく言うことですけれども、一人当たりGNPが二〇〇〇ドルになると、その国は大体落ち替いてくるんです。そうなるのである種の市民社会的な成熟が出てくるわけです。そういうふうな状況になるのは一体いつなのか。よくいって二〇四九年。皆さんも私も、もうこの世にいないときに、ようやく中国はいまの台湾や韓国が数年前に経た状況になる。これは私だけの推定ではなく、中国社会科学院の推定がそうです。最近、鄧小平さんも少し弱気になって、本当の近代化は二十一世紀だ、と言っているわけです。

## 中国に対し日本も忠告を

これはやっぱり、長い間の中国の、まさに明治維新以来の近代化というものに対する日本との大きなギャップだと思えます。これはなにも日本の戦争責任のみに帰せられない問題だと思っただけです。しかも戦後、革命を選び、社会主義を選んだのは中国自身の責任です。そこへもつてきて、毛沢東政治にあれば心酔し、そして文化大革命ではなんと二千万人の死者を出している。これは

中国当局も認めております。日本との不幸な日中戦争のために、異民族との戦争で十五年かかって一千万人の犠牲者が出たと、最近中国でいわれています。前には五百万だったのが急に増えています。中には千二百万という人もいます。かりに中国側の主張を全部認めたにしても、同じ勝利した社会主義者、プロレタリアート同士の間で内ゲバによって、同じ民族の中でそれほどの殺戮が行われたということのいわば代償はどうするのか。命には国境も民族もないというのが中国のプロレタリアートのな国際主義だとするならば、なおさらのことです。

そういういわば血みどろの犠牲を払って、そしてその犠牲の結果、中国がよくなったならともかく、その犠牲を全部ひっくり返してしまつた。ひっくり返してようやく安定してほしいと思つたところが、今度はまたこういうふうにならうとしている。これはなにも日本が軍国主義にならうとしているからでもなんでもないですね。

ですから、そういう中国に対しては、もつとはつきり言うべきことを言う必要があるし、忠告すべきことを忠告する必要がある。そうであるにもかかわらず、とかく日本の政治家をはじめとする指導者の多くは、中曽根首相もそうだったんですけれども、全く逆のことを中国に言ってきたりするような気がします。

やはり私は中国がもつと安定して、本格的に市民社会的な成熟が出来てほしいし、そのことによつて徐々に緩やかに中国が安定してほしい。そう思うだけに、現実の中国の事態に対してはかなりのクリティカルというか、シリアスな見方をせざるを得ないのだ、ということを申しあげまして、私のお話しを閉じさせていただきます。どうも長い間ご清聴下さいましてありがとうございます。

# 慕心

9-10A





「山紫」 第6号

もくじ

山紫会趣意書、会主要役員・顧問

「初心に返って全力投球」

「北方領土返還運動は息長く」

「年頭所感」

山紫会・板垣 正の会昭和62年新春総会

「教科書問題に思う」

「あすの日本を考える」

「中国情勢の展望と日本」

「ひろば」 藤尾発言（文芸春秋昭和六十一年十月号）について特集

山紫会入会のご案内、お知らせ、あとがき

参議院議員 板垣 正 2

参議院議員 板垣 正 3

参議院議員 板垣 正 7

山紫会会長 瀬島龍三 8

東京大学教養学部教授 小堀桂一郎 20

衆議院議員、前文部大臣 藤尾正行 40

東京外国語大学教授 中嶋嶺雄 61

83

78

表紙 美しいチャイブ（ハーブの一種）の花畑  
北海道・中富良野（前田真三氏撮影）

題字 清水鐘眼・書心書道院理事長

8

7

6

5

4

3

2

